

第 17 回 PIC 懇談会 第二部「南の島で暮らす、南太平洋から学ぶこと」(続き)【5/5】

首都フナフティと離島の違いはなんだろう

小川：

夢さんは4歳でおかあさんに連れられていきなりツバルに行ったわけですよね。すぐにツバルに溶け込めたのですか？

もんでん：

はじめはちょっと違いました。ツバルに行っていちばん最初はちょっとフナフティに居たんですが、ちょうど4歳になって一種の反抗期みたいになりました。ただそれは、たぶん私がキリキリしていたからじゃないかと思うのです。銀行に行ったり、毎日船のスケジュールをチェックしたり、いろいろな手続きで政府庁舎に毎日行ったり、けっこう忙しい毎日でした。

で、とにかく一番最初に離島に行く船に乗ろう、ということでバイツプに行ったのですが、島に降り立ったそのときから、4歳の子の表情ががらっと変わりました。

ブヒブヒ豚がいて、犬も猫も鶏もそのへんにいて、4歳の娘はバイツプに降り立った1日目から目を輝かせて遊びだして、フナフティでちょっと芽生えた反抗期がきれいに消えました。

小川：

フナフティと離島ではかなり違うのですよね。日本人でツバルに行く人の多くは首都フナフティ止まりで、それでもたいへんな田舎だと我々は感じてしまうわけですが、「フナフティと、それ以外の島々の暮らしで大きな違いは何かありますか。あるとしたらどんな点でしょうか」というご質問をいただいています。この点はいかがでしょう。

もんでん：

ご質問ありがとうございます。

これまで見ていただいた写真は、少しだけバイツプ島の写真も入っていましたが、ほとんどはナヌマンガ島の日常の中で撮ったものです。こういう狩猟採集や畑仕事で自分の身体を泥だらけにしながらか自給自足していくのが日々の生業であるという暮らしは、離島にしかありません。首都フナフティで日本の方に会うと、「ツバルはヤシの木がいっぱいあつてのどかですね」とよくおっしゃっていましたが、フナフティでは狩猟採集や自給自足はほとんどやっていません。ナヌマンガ島と同じようにとても小さなフナフティですが、今は離島からたくさん人が押し寄せて7,000人近くの人がひしめきあって住んでいて、そういう生活はもう不可能になっています。そこがフナフティと離島の一番根本的な違いだと思います。

小川：

よくわかります。人がたくさん居て、食べ物でもなんでもお金で買うフナフティで暮らしていると、船で行った先の離島は、もう生活ぶりが全然違うんですよね。なんだかんだでフナフティでは、先進国同様お金が必要なんですけど、離島だとお金はいろいろある生活手段のひとつというか。



ツバル人の「海外移住」に関する感覚、そして「よそ見文化」について

小川：

さて、そろそろ時間も迫ってきましたので、あともうひとつだけお願いします。

「ツバルでは、最近オーストラリアやニュージーランドを中心に、先進国に出稼ぎや移住をする人が増えていると聞いています。移住に関してのツバルの方々の考え方はどういうものなのか、お感じになったことを聞かせてください」というご質問です。

もんでん：

ご質問をありがとうございます。

このあたりの感覚はけっこう日本人とツバル人とでは違うと思います。

海外移住、っていうと、日本人だと「国を捨てる」とか「すごい決意ではないの?」と、かなり大ごとイメージしていると思うのですが、ツバル人は「ちょっと出かけてくる」みたいな感覚だと思います。そしてたくさんの方がすでに外国に暮らしています。

今日スライドで紹介した人たちも、すでに家族や親戚がたくさん外国に暮らしています。そういう彼らが外国に行くときは、「ちょっとニュージーランド行ってくるから」みたいな、そんな気楽なイメージです。「甥っ子がいてな、テレビや映画もいっぱいあるっていうから、ちょっと行ってくるわ」と。

で、行ったままそのまま帰ってこないとか。あとウチの父ちゃんの妹でニュージーランドで市民権をとって 15 年ぶりに帰ってきた人がいたんですが、「ニュージーランドはいいわよ。いろいろな学校があるし、子ども賢く育てるならあそこよ」とかあっけらかんと言っていました。

小川：

海外移住とか、国を離れるということにそれほど大きな意味を持たせていない……?

もんでん：

そんなものは全然ないのです。

お手軽さ、という点では、たとえば人ひとりの私物って、ツバルではスーツケースひとつで足りてしまうんですよ。ナヌマンガ島ではスーツケースが家具みたいなもので、大きなスーツケースを、子どもも大人もみんなひとつずつ持っていて、そこに自分の服やら腕時計やら聖書やら、大事なものを全部突っ込んでいます。で、「ちょっとフナフティに行ってくるわ」となったら、そのスーツケースをがっつと持って船に乗るという感じです。ニュージーランドに行く、というのもその延長にある感覚です。

小川：

その辺は日本人とはかなり違いますね。ほかに日本の感覚とツバルの感覚で違うなと思ったことはありますか。

もんでん：

あ、そこでひとつ、とってお話ししたいことがありました。

私はいろいろな文化を見ることが大好きで、ごじ編みや工芸にすごく興味を持っていま

す。さっきのスライドにもありましたが、島に行くとゴザの編み方なんかをたくさん教わってせっせと作ったりしています。

で、日本だと、そういう時に「今日は何段目まで!」とか目標を決めて、集中してやったりしますよね。私が日本で働いていた会社では「今月の売上目標」とか言って、グラフを張り出したりしていたこともありました。

で、一心不乱に仕事しながら、横で一緒に編んでいるマロソーばあちゃんはというと、通りを見ながら、「クルアキ、どこへ行くの? え、マッチを買いに? だったらそっちの店は売り切れているよ、あっちに行ってみな」と通りがかったおばちゃんと話をしたり、そのへんで小さい子が木に登ろうとしていると、「駄目駄目。あんたまだそんな年じゃない。木に登る年じゃない。おにいちゃんになるまで待ちな。危ない」とか声をかけたりしているんです。

玄人ですから手は私より数段早いんですけど、そっちでけんかをしている子どもを見たら、「何しているの、あんたたち!」と叱ったりとか、とにかくひとつのことに集中していない。時には嫁さんが料理をしているのを見て、「大丈夫? 手は足りてる? 私、手伝おうか? じゃ行くわ。よっこらしょ」という感じで、ゴザ仕事をほっぽらかして料理をしに行っちゃうこともあります。そうすると今度はしばらくして別のおばちゃんに来て、「あら、こんなふうに編んでいるの。じゃあ、ちょっとあたしがやろうかね」とか言って、いつの間にか代わりに座って編み始めたりします。

こういうところに、私は自分の日本人気質と南の島の文化の違いを強く感じました。南の島では、仕事は誰かひとりが集中してノルマをこなすことではない。誰がやってもいいんです。それよりも大事なことは、通りがかった人と会話して情報を交換したり、子どもの行動を見て指示を出したり、時には手を止めて別の仕事に力を貸したり、そういう部分なんです。私が日本の会社で教えられてきた「ここは私の責任ですからやらせてください。頑張ります」というのはじつは日本の文化で、よそ見をしながら仕事をするのが、ツバルではとても大切なことなのだと思います。私はこれを勝手に「よそ見文化」と命名してみたんですけど、今日はぜひこれを皆さんにお話ししたいと思っていました。

小川 :

おもしろいですね。私はそういう視点で見たことはなかったんですけど、そういえばそうだったなあとても納得できました。そしてもんでんさんのおはなしを聞きながら、なんか本当に南の島に帰りたいなあという気持ちがありました。





**手しごとと技術の継承を**

小川：

話は尽きないのですが、残念ながらそろそろお時間が迫ってきました。

もんでんさんのツバルでのお話しは、もんでんさんのホームページに詳しく載っていますので、ぜひいちどご覧下さい。それからもんでんさんは『子連れ南の島暮らし』という本も書いていらっしゃいます。ツバルの話、ツバルに行くまでのもんでんさんご自身のこと書かれていますので、ぜひご一読下さい。

最後にもんでんさん、これからのご予定などを。

もんでん：

私は年内にはまたナヌマンガ島に帰りたと思っています。さっきも言いましたが、ござ編みとか手工芸品づくりとか、私は手仕事が好きなのですが、日本でわらじを編める人がほとんど居なくなったように、ツバルでもそうした技術を持っているばあちゃんたちがどんどん高齢化してきています。私はそれがとても切なくて、何とかできないかと思っています。それが今、私にとっての最大のテーマになっています。

とはいえどうしたらいいのか、考えめぐねているところでもありますので、ヒントをくださる方がいらしたらぜひ教えて下さい。もし今日の話聞いて興味を持ってくださる方がいらっしゃいましたら、私の本の出版社にお手紙をくだされば私に必ず届きますので、よろしくお願いします。そして、もしよかったらいっしょにナヌマンガに行きましょう。1～2カ月では帰れないですけど（笑）。

小川：

きょうは本当にどうもありがとうございました。もんでんさんにもう一度大きな拍手をお願いします。（拍手）

ありがとうございました。

（この講演録は、当日の講演内容に基づいて事務局が再構成したものです）

**もんでん 奈津代**

1967 年生まれ。南太平洋生活研究家・ツバル語通訳。

早稲田大学で文化人類学・言語学を専攻。卒業後、マーケティング、英語教師、日本語教師、翻訳などの仕事に就くかわら、ソロモン諸島マライタ島、フィリピン、バリ島などでホームステイをしながら現地の言葉を習得し、生活文化を記録していく。

娘が1歳のときにサモアに子連れで滞在。その後ツバルの離島に魅了され、母子で長期滞在を繰り返し、同地の文化・民族美の探求を続けている。ナヌマンガ島暮らしの様子は2008年10月にWOWOW「～クエスト・探求者～夢菜・7歳の島」として放映され、話題を呼んだ（テレビカメラがこの島に入ったのは史上初）。

著書に『ツバル語会話入門』（2008年キョートット出版）、『子連れ南の島暮らし』（2010年人文書院）がある。

ホームページ：<http://mondend.daa.jp/tuvalu.html>

